檀信徒にやさしく説く

曹洞宗 偈頌解説

第一部　法会の偈頌

第一章　日課法要
第二章　施食会
第三章　喪儀
第四章　晋山・浄道場
第五章　出家得度
第六章　その他の法要の偈頌

第二部　作法の偈頌

第一章　食事作法
第二章　その他の作法
第三章　偈牌

第三部　塔婆の偈頌

第一章　中陰塔婆
第二章　年忌塔婆
第三章　角塔婆

第四部　禅林の名文句

三　懺悔文（さんげもん）

我昔所造諸悪業
（がしゃくしょぞうしょあくごう）
皆由無始貪瞋癡
（かいゆうむしとんじんち）
従身口意之所生
（じゅうしんくいししょうしょう）
一切我今皆懺悔
（いっさいがこんかいさんげ）

《我むかしより造れる所のもろもろの悪業は、みな無始の貪瞋癡により、身口意より生ずる所なり。一切を我今懺悔す》

「懺悔」は一般には「ざんげ」と読まれることが多いようですが、仏教語としては「さんげ」と読むのが正しいのです。

宗教行（あス）もっと深く説く　四

南無（なむ）と帰依（きえ）

すでに死語になってしまったようですが、古い時代小説などを読んでいますと、うっかり失敗をした登場人物が「南無三（なむさん）！」と叫ぶ場面が見られます。今なら「ああ」とか「しまった」などと言うところです。中には「Oh my God!」なんて叫ぶ人もいるかもしれません。実は、「南無三」は、この「Oh my God!」に近い言葉なのです。

もともと「南無三」は「南無三宝（さんぼう）」の略で、仏・法・僧の三宝に対する信仰を表明する言葉でした。それが、危難の時などに仏の加護を祈る文句となり、とっさの時にも言いやすいように、「南無三」と縮められたのです。さらにそれが感嘆詞のような使われ方をするようになり、失敗や危機一髪の場面などで叫ばれるようになったのです。

しかし、感嘆詞として使われるようになってからでも、もとの三宝などへの信仰が消えてしまったわけではなかったろうと思います。半ば無意識に「南無三！」と叫びつつも、心の片隅ではこの窮状を仏様が救ってくださらないかと願っていたのではないでしょうか。

それはともかく、感嘆詞になってしまうくらいですから、かつては「南無三」や「南無三宝」という言葉が頻繁に使われていたのでしょう。

「南無三」だけではありません。浄土門の信者たちは「南無阿弥陀仏」を熱心に称えていたでしょうし、日蓮の信徒は「南無妙法蓮華経」を高らかに称えたでしょう。また、真言宗の信徒などは「南無大師遍照金剛（なむだいしへんじょうこんごう）」を称えたでしょうし、禅門では「南無釈迦牟尼仏」が称えられたはずです。「宗論」という狂言では、浄土宗の僧と日蓮宗の僧が競って念仏と題目を称えあったために、称えることが入れ替わってしまうという場面を描いています。そんな話ができるほど、あちこちで「南無……」「南無……」と称えられていたのです。

ところで、これらの称えごとの頭についている「南無」とは、どんな言葉なのでしょうか。

「ナム」という不思議な音から想像できますように、インドの古語のサンスクリット語の発音を写したものです。「納莫（のうまく）」意訳語もありまして、ぇうものです。

「帰命」とは命令に帰して全幅の信頼をおいて

れません。時には「仏教でも懺悔をするんですか？」などと言って、住職を驚かせる人もおられるようです。たしかにキリスト教において懺悔は重要な意味をもっています。しかし、「懺悔」という言葉そのものは本来仏教のもので、キリスト教の儀礼などを日本語に訳する際に、意味が同じということからこの仏教語を訳語として採用したのです。この時に仏教語の懺悔と区別するために「ざんげ」と読むようにしたのかもしれません。いずれにしろ、「懺悔」は仏教が元祖であって、間違ってもキリスト教のマネをしたのではありません。

しかし、キリスト教にしろ仏教にしろ、懺悔が教義の上で重要な意味をもっていることは同じです。まず自分が背負っている罪の重さ――キリスト教であれば原罪を、仏教であれば永い輪回の生の間に積み重ねてきた罪を――思い、その自覚をバネとして強い信仰心を得るのです。伊藤古鑑氏は懺悔することについて、次のように述べられています。

第六章　その他の法要の偈頌

一　十仏名（じゅうぶつみょう）

清浄法身毘盧舎那仏
（しんじんぱしんびるうしゃあのうふう）
円満報身盧遮那仏
（えんもんほうしんるしゃあのうふう）
千百億化身釈迦牟尼仏
（せんぱいかしんしきゃあむうにいふう）
当来下生弥勒尊仏
（とうらいあさんみるうそんぶう）
十方三世一切諸仏
（じいほうさんしいいしいしいふう）
大乗妙法蓮華経
（だいじんみょうはりんがきょう）
大聖文殊
（だいしょ）
大乗普賢
（だいじょ）
大悲観世
（だいひか）
諸尊菩薩
（しそん）
摩訶般若
（もうこは）

十仏名は文字で、修行僧が禅に称えられます。ご覧のように十一句あり（一大乗妙法蓮華経）一摩訶般若波羅蜜）のように仏名ではないものも含まれています。臨済宗や黄檗宗（おうばくしゅう）

三　食事の偈

《若し飲食する時は、当に願うべし衆生、禅悦を食とな して、法喜充満させんと》

（食後の偈）
飯食已訖（ぼんじきいこつ）
当願衆生（とうがんしゅじょう）
徳行充盈（とくぎょうじゅうよう）
成十種力（じょうじっしゅりき）

《飲食已（すで）に訖（おわ）らば、当に願うべし衆生、徳行充盈して、十種力を成せんと》

一　袈裟頂戴（けさちょうだい）の偈

大哉解脱服（だいさいげだつぶく）
無相福田衣（むそうふくでんえ）
披（被）奉如来教（ひぶにょらいきょう）
広度諸衆生（こうどしょしゅじょう）

《大いなる哉（かな）解脱服、無相の福田衣、如来の教えを披（ひら）き奉り、広く諸（もろもろ）の衆生を度せん》

袈裟を身につける時に称える偈頌で、搭袈裟偈（たっけさげ）ともいいます。出家得度で袈裟を授けられる時にも、この偈が称えられます。

檀信徒の中には、どうしてお坊さんは袈裟をつけているのだろうと不思議に思われる方もいることでしょう。簡単に申してしまえば、袈裟を身に

三五、【洞山麻三斤（とうざんまさんぎん）】

「洞山三斤」または「麻三斤」ともいいます。『碧巌録（へきがんろく）』一二、『無門関』一八に出る洞山良价（とうざんりょうかい）の問答に基づく言葉です。ある僧が洞山に「如何なるか是れ仏」と尋ねたのに対し、洞山は「麻三斤」と答えたというものです。この場合の「麻三斤」は服一着分の分量とされますが、それ自体には特別の意味はなく、南泉普願が南泉への道を開かれて「我が芋鎌子（ぼうけんす）（芋刈り鎌、三十銭に買い得たり」と答えたのと同様に、具体的に存在している現実を示したものと思われます。すなわち、観念的な世界に仏が存在するのではなく、この現実の実際の中に仏がいることを示したものです。

三六、【若（も）し全肯（ぜんこう）すれば則ち先師に辜負（こふ）す】（若全肯則辜負先師）

行品は、大乗仏教の修行者が日常生活の行為を通して願うべき衆生の救済のことが説かれています。食事の偈のところでは、食事をいただくということを契機として、一切衆生が仏法の恵みに満たされることを願うべきことがいわれています。

ただし、面白いことに、食前の偈と食後の偈とは同じ訳の引用ではないのです。食前の偈が実叉難陀（じっしゃなんだ）訳の通称『八十華厳』の引用であるのに対して、食後の偈の方は仏陀跋陀羅（ぶっだばだら）訳の通称『六十華厳』の引用なのです。参考までに異訳を示しておきますと、食前の偈は『六十華厳』では、第一句が「若嚥食時」となっています。また、食後の偈は、『八十華厳』では、第三・四句が「所作皆弁、具諸仏法」

『祖堂集』六に見える洞山良价（とうざんりょうかい）の言葉です。師の教えをすべて肯定したならば、それはかえって師に背くことになる、という意味です。禅の参究はすべて自己自身のものでなければなりません。師の教えは師のものであって、いかにすぐれていてもそのままの形で他人が受け入れることはできません。それゆえ、無批判にすべてを受け入れているとしたら、それは真に自分のものとしたわけではなく、仏法を伝えようとしている師の心に反することになるのです。

三七、【主人公】

今では物語やドラマなどの中心人物の意味に用いられますが、もとは家の主のことで、「ご主人様」といった意味の言葉です。禅語としては、瑞巌師彦（ずいがんしげん）が自らに対して「主人公」と呼びかけ、「惺惺著（せいせいじゃく）」（はっきりと目覚めていなさい）と答えていたという故事に基づき、自己本来の面目を表わす言葉として用います。

行者が身を飾りたてることを厳しく禁

が仏弟子の証となるからなのです。

よく見られたいというのは欲望であり、煩悩より生ずるものだからです。頭を剃るのもそのためで、髪型などに気を取らないようにする意味があるのです。服装につきましても、あえてボロを身にまとうようにするべきだと説かれています。そこでインドの修行者たちは、ゴミ捨て場などから古びた布のを拾ってきて、その丈夫なところだけを縫い合わせて使っていたのです。言ってみればパッチワークですが、お経にはどのように綴って作るのか細かく定められています。ボロ布なのだから、どんな風に縫ってもよさそうなものですが、これも自由にしておくと、こう縫い合わせたら見栄えがいいとか、こういう色の組み合わせが格好いいといった見栄が出る。それを抑えるための決まりなのでしょう。これが袈裟の原型です。

ただインドは暑いですから、そのような衣服だけでも大丈夫でしょうが、冬が寒い中国や日本はそういうわけにはいきません。防寒用の衣服が必